View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

漢代における龍文化の構造と展開 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	周 正律
発行年	2017-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第647号
URL	http://hdl.handle.net/10112/11299

［31］

氏　　名	周　正律（しゅう　せいりつ）
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学　位　記　番　号	東アジア文化博第 23 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 29 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	漢代における龍文化の構造と展開
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　藤田　髙夫
	副 査　教　授　中谷　伸生
	副 査　准教授　篠原　啓方

論 文 内 容 の 要 旨

周正律氏の博士論文『漢代における龍文化の構造と展開』は、東アジア諸地域に共通する龍と龍にまつわる諸文化を「龍文化」として把握し、その源流を中国漢代に措定して、同時代における龍に関する言説と龍の具体的イメージを全面的に検討した労作である。以下、本論文の構成に基づいてその内容を要約する。

序章においては、先行研究の整理と本論文の方法的独自性が述べられる。筆者は従来の龍に対する研究を、龍の起源を求める方向と龍文化の発生と発展を跡づける方向に大別し、その成果と課題を摘出した上で、いずれにも見られる方法上の問題として、二つの弱点を指摘する。一つは、文献資料の記載と図像イメージとの安易な接合であり、もう一つは龍に関わる資料それぞれの時代性への無頓着である。端的に言えば、ある時代の龍の図像を解釈するために、遙か後世の文献の記述を援用することがまま見られ、これがそれぞれの時代における龍文化の正しい理解を阻んできた、ということである。これに対する反省が、本論文の基本的な研究姿勢となることが、序章において述べられる。

３章からなる前篇は、いずれも文献資料を用いて漢代までの龍文化に関する言説を整理する。「第一章　龍の生態と能力及びその伝承」では、文献資料を先秦文献と漢代文献に大別し、龍とはどのような生き物として認識されていたかを、いくつかの要素に整理して概観し、最後にこの時代の文献には龍の具体的姿を述べたものがほとんど存在していないことが指摘される。「第二章　龍と関連する人物」では、龍になぞらえられる人物の記述を分析し、その人物の能力と龍の属性との関係を確認していく。そこで筆者は、漢代には龍と王権との対応が占有的なものではなかったことを論証している。「第三章　漢代における龍の属性の多様化」では、龍の能力・効能をいくつかの面から整理し、それらが時代を追って次第に龍に付随する力として追加されていったことを跡づける。

以上の文献資料に基づく前篇に対し、４章からなる後編は、画像石に見られる龍の図像に焦点を当て、具体的な龍の姿を総合的に捉えようとする。「第４章　動物図像の識別法―漢画像石における龍の図像を中心に」は、後編全体の方法論を提示したものである。ここ

ではまず少ないながらも龍の具体的姿に言及した文献の記載を検討し、龍の特徴として何に注目すれば良いかが検討される。次いで、従来の龍の画像の識別方法を批判的に検討し、それが後世の龍のイメージを漠然と漢代の画像石に援用したものであることが説かれる。これに対して筆者は、画像石における画像を龍であると認識するための指標を提示する。この指標に照らして漢代の画像石を見直したときに、従来は龍とされてきたものが実は龍とは別個の生き物と判断される場合や、逆に龍と見なされていなかったものが龍と判断できる場合などが具体的に指摘される。ここで提示された指標に基づいて、膨大な数の画像石を分析していくのが第５章以下の各章である。そこではまず漢代画像石の分布を大きく５つの分布区に大別し、それぞれの分布区で見られる龍の画像イメージを分析していく。「第５章　漢代画像石における龍の図像の変遷　その一」は漢代画像石の宝庫ともいえる山東や徐州など第一分布区の分析である。この分布区では龍の画像をもつ４７基の画像石墓がとりあげられる。画像の分析では、「角」「耳」「口鼻部」「鱗」「足･掌」「棘」「尾」「肘毛あるいは翼」といった龍の各部位の検討がなされるとともに、墓葬中におけるそれぞれの画像の位置や虎など他の画像との組み合わせのパターン、あるいは「双龍穿璧」「双頭龍」の構図など、画像分析の視点が多角的に示される。同時に龍の体型を「蛇型」と「走獣型」に大別し、前者から後者への移行が生じていることが指摘される。また第一分布区内部における地域差にも注意が向けられる。第５章での分析手法は、それ以外の分布区の分析にそのまま援用される。「第６章　漢代画像石における龍の図像の変遷　その二」は、第一分布区とならんで画像石の宝庫である河南および湖北北部の第二分布区の画像石の分析、「第７章　漢代画像石における龍の図像の変遷　その三」は、陝西北部・山西西部の第三分布区、四川を中心とする第四分布区、洛陽近郊の第五分布区、およびそれ以外の地域の画像石の分析である。第二分布区では２３基、第三分布区では２４基、第四分布区では２６基、第五分布区では壁画もふくめて１０基、それ以外の地域では５基の画像石墓が取り上げられる。各分布区について、第５章での分析視角にもとづき、龍の各部位、全体的体型、墓葬内での配置・構図などが個別に検討される。

「終章　漢代における龍の外形の定型化とその展開」は、本論文全体の結論である。そこでは、前篇で議論された龍の属性をおおきく「水との関連性」「飛翔能力」「天文＝蒼龍星象」の３要素として概括し、基本的にこれらの要素は漢代までに共通のイメージとして定着しているが、同時にこれ以外の要素が追加され、龍の属性の多様化も進展していることが述べられる。さらに時代性・地域性の検討のためには画像石の活用が有効であることが力説され、後篇での分析結果が総括される。すなわち、龍の外形の各部位には、漢代には全国的に統一性が見られること、また時代的には蛇型から走獣型への移行が確認され、走獣型の発生は中原地方であろうと推測される。これをふまえて終章では、龍文化に対する「楚文化」の影響が検討され、北の中原的要素と南の楚の要素が後漢時期に再編成されていくことが展望として述べられる。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は中国の文化的表象として最も代表的な龍について、その言説やイメージがほぼ

固まったと考えられる漢代に焦点を当てて検討したものである。誰もがイメージできる龍について、特定の時代に絞って総合的に検討を試みた業績は、意外なことにこれまでほとんどなかった。本論文は、従来の研究の方法的未熟を克服し、龍文化研究の本格的な第一歩たらんとした挑戦的なこころみである。

前篇での文献資料を用いた研究は、先秦文献・漢代文献を博捜して龍に関する言説を可能な限り収集したものであるが、文献資料の持つ射程の限界が意識され、その範囲の中に議論を制限していることは、一面では物足りなさも覚えるものの、研究姿勢としてはきわめて健全な方法であると評価できる。また漢代文献から龍と天文との関連が出現し、それが龍のイメージや属性と深く結びついていくことの指摘は説得力を持っている。前篇の諸章からあらためて感得されるのは、文献上に見られる龍の言説がきわめて偏在していること、つまり龍全般を述べるものは皆無で、すでに人々が共有している龍のイメージを元に特定の部分が議論されていたという事実である。従って当該時代における龍のイメージを全般的に把握しようとすれば、文献資料以外の素材、すなわち画像石を用いることが有効であり必須であるとする本論の立場は、異論をはさむ余地がない。

画像資料を用いた後篇のうち第五章～第七章は、本論文の白眉であり、圧倒的な印象を与える。画像石資料の収集に際して筆者は、代表的な画像石集のみならず、零細な発掘報告を丁寧に検索し、その中から龍に関連する画像を丹念に摘出して素材としている。その作業の徹底ぶりは、参考文献として掲げられた膨大な発掘報告を一覧すれば直ちに了解できる。また１３０基を超える龍の画像を持つ画像石墓の分析から得られた知見、すなわち漢代における龍の画像の「定型性」の発見と、「蛇型」から「走獣型」への移行は、個別の発掘報告を読んでいる限りは決して見えてこない成果であり、龍研究を大きく進歩させる貴重な業績であると評価できる。

ただし、図像学という点からすると、なお検討すべき余地は残っていると思われる。一つは、画像石分析の際に用いた分布区の妥当性である。漢代画像石の全般的分析としては信立祥氏の区分が定説として学界でも受け入れられ、本論文もその分区に準拠して考察がなされているが、本来ならば龍の図像のみに絞って個々の特徴を検討し、それに基づいて龍図像による画像の分布区を構築する、という方法をとるべきではなかったろうか。また、画像の時代的変遷を跡づける際には、個々の発掘報告の断代にしたがって画像の時期区分がなされているが、1980 年代までの中国の考古発掘における断代は、発掘者の主観による時期区分が提示される場合が多く、全国的な断代基準のない時点での時代判定は、そのままでは受け入れられない部分が現在ではあるだろう。これまた、龍の画像そのものに限定して時代的変遷をあとづけ、その上で龍画像の時期区分を提示するという手順を踏むべきではなかったか、という不満も残る。

しかしながら、上述の弱点はなおあるものの、本論文はその方法的自覚や立論の確実さ、さらに資料に対する厳格な態度など、ややもすれば印象論に傾きがちであった従来の龍研究とは明らかに一線を画するものである。本論文に付された図像一覧だけでも、龍研究の第一級の基礎資料としてすぐにでも活用できることが示すように、龍研究としての本論文はきわめて高い学術的価値も有している。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認めるものである。